

Mastery for Service 100年

マスタリー・フオア・サービスマスターの歴史

井上 琢智

ご紹介いただきました学長の井上です。ご承知のように関西学院では『関西学院百年史』の編纂と並行して一九九五年から「関学」学という授業（総合コース「日本の近代化と関西学院」）を毎年続けています。何人かの教員で、一人一、二回ずつ分担して授業をしますが、その中で話したことも踏まえながら、そして学長職に就いてから少し考えること、変化したこともありますので、そのことも踏まえてお話ししたいと思います。このレジュメは九十分の授業用に作っており、今日はあまり時間がありませんので、細かな所はあとでお読みいただくということでお許し

いただきたいと思います。一方、これからお話しする資料は学院史編纂室の池田裕子さんによって提供されたものが多くあります。もちろん解釈等は私のものですが、提供いただいた資料、なかでも最後に掲げています参考資料は、今回の話に際して使わせていただくものです。とりわけ辻学さんの二本の論文（『奉仕の練達』―校訓の翻訳をめぐる『商学論究』第五〇巻1/2、二〇〇二年十二月、「校訓 Mastery for Service」と『ベーツ文書』『関西学院史紀要』第一二号、二〇〇六年）、宮原浩二郎さんと辻さんとが対談されたもの（『Mastery for Serviceの光と影』『関西学院史紀要』

第一三号、二〇〇七年)、そして最後の池田さんの書かれたもの(「スクール・モットー」: *Mastery for Service*、提案の背景—マギル大学マクドナルド・カレッジと関西学院高等学部の場合を比較して—草稿)が参考になっています。

「変わらないもの」と「変わるもの」

「建学の精神」そのものは、関西学院が教育機関として存続する以上、変わらないし変えてはいけないものだと思います。キリスト教主義教育といっても、いろんな解釈もあり得ると思いますので、そういうものをどう理解しているかについてはなかなか私の理解の及ぶところではありません。学生のみなさんも、そして卒業生のみなさんも、クリスチャンであろうとなかろうと、「建学の精神」、キリスト教主義教育とは何かということについては生涯考え続ける大きな課題であろうと思います。しかしながら、実際教育現場では中等教育から始まった関西学院としては、若い青年にキリスト教主義そのものを伝えることはなかなか困難だとすると、やはりその内容を具体的に示す「校訓」であるとか、モットーといわれているものが必要でした。その限りでは「変わらないもの」としてのキリスト教主義教

育を基盤とする関西学院ということと、私の言葉で言えば、その「建学の精神」を具体的に行動として表す指針「行動指針」を示すものが「スクール・モットー」だとすれば、それは時代と共に変わってもいいものだと私は思います。過去の例を見ますと「公明正大」という言葉があります。これは関学の卒業生の永井柳太郎がしばしば重要視したその当時の生徒の生き方を示したものです。よく例として挙げられているのはカンニングで、試験を受ける時、試験監督者である先生が教壇から去って行ってもカンニングをせず、神が見ているという気持ちで「公明正大」に試験を受けていました。そのことを永井柳太郎は非常に強く想っていてこの言葉を揮毫しています。現在それは、高等部棟二階の小会議室に掲げられています。この言葉は、その当時の青年期の学生にとっては、ただ単に試験ということだけではなくて、学生、生徒としての行動指針・規範を示すものであっただろうと思います。

また、吉岡美国先生は「敬神愛人」という言葉を使われました。これは学生、生徒にはそれ自体は難しい行動指針かも知れませんが、吉岡先生はこの言葉を非常に重視された。「敬天愛人」ではない「敬神愛人」を強く主張されたように思います。「敬神愛人」という言葉は、中村正直が言っ

た「敬天愛人」、そしてそれが伝わって西郷隆盛が使った「敬天愛人」とは違って、吉岡先生にとっては「天」ではなく「神」を使うことに大きな意味がありました。幕末・明治初期に中国からキリスト教が伝道された際に、Godを「天」と訳すか「神」と訳すかいろいろ議論があったようですが、詳しいことについては、私のメモ書きのものがありますので、それを読んでいただければと思います。今日は学生さんも多くおられますが、ぜひ「天」と「神」でどう違うかといったところも少し調べていただければと思います。私やグルーベル院長の今日の話は、みなさんが自分でこの言葉の意味を捉えるためのきっかけを作っているものですので、ぜひそのように理解していただいて自分の研究材料にしてくださいと思います。

関西学院百二十三年の歴史のなかで「校訓」「スクール・モットー」とかそれに近いものとして用いられているのは、私が拾い上げられた限り、この二つが重要なものであったと思います。そのほか吉岡先生は卒業生に贈る言葉としていろんな言葉を使っておられますので、そういうものも「校訓」にあたるかも知れません。私の論文「吉岡美国と敬神愛人」〔関西学院史紀要〕第6号（第10号）の最後に一覧表を掲載していますのでご覧ください。どういふ言葉を先

生が好まれたかということがわかっていただけるだろうと思います。このように「変わるもの」と「変わらないもの」の二重構造を持つということは、ある組織が、場合によってはある人間が生きていくためには極めて重要なものだろうと思います。ひとつのものをだけを「変わらないもの」としてまさに鉄のように、コンクリートのように建ててしまおうと何か揺れがあった時に崩れるのではないかという心配を私はします。「竹のようになやかに」という言葉は私の好きな言葉ですが、緩やかさとか弾力さをもたせるには、こういう確固として「変わらないもの」と、それを周りから支える「変わるもの」、それが時代とともに変わっていくことで、私たちの年齢であれば、ひとりひとりの生き方であれば、年とともに変わっていてもいいものだろうと思います。柔と軟とが合わされてひとつのきちんとした構造を作るのではないかと私は考えて「変わるもの」と「変わらないもの」、「見えるもの」と「見えないもの」ということで表現しようとしています。

このような関西学院の初期の歴史に続いて、“Mastery for Service”が「スクール・モットー」として作られるわけです。関西学院と一緒にあった聖和には、レジユメにありますような三つのものがいわゆるモットーにあたるも

のとして使われています (① All for Christ 「キリストに心を向け」 ② Seiya College for Christian Workers 「キリストの働きの人を育てる聖和」 ③三つの H Head 「真理の探究」 Heart 「自分を愛し人を愛する心」 Hand 「奉仕と実践」)。これらの言葉は関西学院と強く結びついている言葉であり、学校を支える考え方であり精神です。表現の仕方が違ったこの三つの柱にせよ関西学院の先に挙げた二つの「スクール・モットー」にせよ、関西学院と聖和が一緒になる時に、聖和のモットーが関西学院に受け入れられ、関西学院のスクール・モットーが聖和の学生や生徒、先生に受け入れられたと私は信じています。

“Mastery for Service”

“Mastery for Service” のルーツについては、すでに公表されていますのでみなさんお読みになったと思います。聖書の出典はじめ参考資料と掲げましたもの読んでいただきますと、この言葉がベーツ先生のオリジナリティではなくて、彼が学んだ学校のマクドナルド・カレッジのスクール・モットーであったと指摘されています。しかし、ベーツ先生がどういう意図でこれは日本では解釈され

るかということも、おそらく非常に深い理解のもとで使われたのであろうと思います。そのことは関西学院のスクール・モットーそれ自体が、後から結論で申しますが、その後も関西学院の同窓のなかに非常に強く残っていた言葉となったのだらうと思います。レジュメにあります写真は、『K.G.TODAY』 vol.269 にカラーで出ていますのでぜひご覧いただければと思います。「一連の説教 “Service” “Equipment for Service” “Efficiency for Service” に関心

を持った(カレッジ長の J・W・) ロバートソンが、(ウィリアム・マクドナルドと検討中だったカレッジのモットーのことで (トーマス・D・) ジョーンズに相談したのです。この他に考えられるテーマはないかとの質問にジョーンズが答えたのが “Mastery for Service” でした。」とあります。この言葉を関西学院にもふさわしいものとして、ベーツ先生が関西学院のスクール・モットーとして据えられました。過去にあったものも踏まえてこれを唱えられたということの深い意味を私たちは考えるべきだろうと思います。しかしなぜ高等学部商科のスクール・モットー “Mastery for Service” が関西学院全体に拡がったのでしょうか。そこに少し書いてありますように、原田の森でもこの言葉が掲げられ、そして上ヶ原に移ってからも時計台、中央講

堂、ともに一時期外されたにせよ再び掲げられ、そして校歌「空の翼」の歌詞にスクール・モットー “Mastery for Service” が出てくることによつて、おそらく自覚的だろうと思いますが、関西学院全体の大学を含めたスクール・モットーになつていくのだろうと思います。関西学院の言葉そのものが、元々は一部の学部のものであったのがどんどん拡がっていったということは、この言葉がいかにその当時の人びと、学生、教職員に繋がっていったかということがわかるだろうと思います。理由は最後に申し上げたいと思います。

“Mastery for Service” の歴史と構造

レジュメの二頁をご覧ください。戦争中の “Mastery for Service”。これは辻さんの研究成果の一部で、少し借用させていただいています。当時文部次官から関西学院大学の専門部長等に問い合わせが来しました。いわゆる「校訓」は何であるかというものです。それぞれ回答は違っていますが、片方はカタカナで『マスターリー、フォア、サービス』と書き、敵性語、若い方わかりますか？ 敵性語というのは戦争をしているアメリカの言葉、英語を使つては

いけないので、カタカナならば日本語ですから、敵性語である英語表記はでないということです。敵性語を避けてカタカナで書く、もう一つの高等商業学校の方の「校訓」は、『奉仕ノ為ニ練達セリ』という今日の訳に近いものを使っています。重要なことはその後に出てくる文章です。両方とも「滅私奉公」という訳をつけていることは、やはり戦争中のこととはいえその当時の日本の大きな動きの中でそう答えざるを得なかったように思います。積極的だとは思いませんが極めて矮小化された形でこの “Mastery for Service” が「滅私奉公」を意味するものとして使われざるを得なかったことには注目をしていただきたいと思います。この言葉自身、主語が明確でないし目的語がはっきりしません。ですからカナダで使われた時も “for Service” の後に何がくるかということは恐らく大きな課題だったと思います。主語は関西学院に連なるすべての人びとを指すということは当然と思います。しかし、「誰に對してか」という目的については、戦争中の「滅私奉公」はお国のため、日本国のためにと先ほど申しましたように矮小化された言葉になつてしまったことは、時代の流れとはいえ、それをどう評価するかはいろんな立場があるだろうと思います。その当時は関西学院にも軍人が配属されて

いました。何かがあると軍事教練等で絞られるのです。このような状況のなかではこのように答えざるを得なかったのだろうと思います。今日のテーマとは関わりませんが、今は倉庫になってはいるのですが、奉安殿（庫）が関西学院に残っています。これをみなさんに見てもらえるようにしたいのですが、準備がまだ整っていません。戦争中のキリスト教主義の関西学院の生き方は綱渡りであつたらうと思いますから、その綱渡りの状況をぜひ、特に学生には勉強していただきたいと思っています。

“Mastery for Service” の全訳はいろんな形で翻訳をされてきました。一部省略するとはいえ、全部を訳したものは二つありますが、訳のあり方についてもいろいろ戦争の時代の反映があるのではないかと考えています。どこが省略されたかということ詳しく書いてはいませんが、一部省略することによって、その時代や日本での適用するために、どのように省略したらいいか、当時の人びとは考えています。その是非はともかく、省略された訳文が載っています。訳で見ることも極めて重要ですが、ぜひ英語でこの文章は読めるようになっていただきたいと思います。読みにくさもあります。かつてこの今回の新しい訳ができるまでに当時総合政策学部長であった天野明弘先生が訳された

ことがあります。それは公にされたものではなく、資料として残されているだけです。その他、以前は卒業証書にも“Mastery for Service” 全文を、一部相応しくないところを省略して載せたこともありました。

私がこのような問題を考えるに至った原点は学生時代です。大学紛争―学生は大学闘争といっていたのですが、皆さんにその違いを分かっていただけです。ようか―の時、私は関学の三年と四年の学生で、その時の想いが非常に強く残っています。是非は問わないでください。現実そこにいた学生で、その時収束をするにあたって出された「小寺学長代行提案」は、関西学院のキリスト教を考える、キリスト教主義を考える上で極めて大きな意味を私にとつては持っています。文章はお読みいただきたいと思いますが、重要などころだけを拾い読みしたいと思います。その意味を是非みなさん自身が考えていただきたいと思います。

「学院には国立大学にはないよい意味での家族主義的な暖かい雰囲気が見られた反面、それは厳しさを欠いた古いキリスト教的『共同体』理念に固定化され」、そして「キリスト教の『愛』『奉仕』『寛容』の精神が語られ、またそこからそうした精神を体した多くの人材が育成されてきたことは多角評価されねばならない。しかし他方で、そうし

た言葉はしばしば個々人の内面的な心情においてとらえられ、これらの言葉のうちにひめられた厳しさも個々人のうちに押しとどめられて、キリスト教そのものが『心情』または『道徳的な教え』となった結果、それらのもつ本来の厳しさを失ってムード化していきらいがある。『マスター・フォア・サービス』も、こうした厳しい自分の否定を内に含んだ愛を示している」さらに進んで「消極的人格を目指すのではなく、さらに一歩進んで、相手を自身に対する根本的な問いとして真摯に受け止めるような能動的な人格を目指すものでなければならぬ」と書いています。

関西学院の古き良き時代の優しさ、寛容さを私たちは原点にもどる際にはしばしば大切にしてきました。それは関西学院の良さです。そのことは何も否定しませんが、それだけに終わったということをこの文章は反省しています。いまこの根本的な問いかけがどのように生かされているかということについては、非常に厳しいと思います。しかしながらこの問いかけは、――大学紛争は一九六九〜七〇年ですから――、学生のみなさんはまだ生れていないときの話ですが、その時期にこういう問いかけがなされたことの意味は、その賛否はいろいろあるにせよ、関西学院にとって根

本的な問いかけとして今後ももっていかなければいけない、そういう問いかけであろうと思います。

この「Mastery for Service」の構造と問題点が出てきます。一つは 'self-culture' (自己修養) と 'self-sacrifice' (自己献身) 'Master' (主人) と 'Servant' (仕える者)、この言葉に、ヨーロッパの伝統の中にあるひとつの徒弟制度を思い浮べる方があられるかもしれません。その中に 'Master' という存在が位置づけられることがあるかもしれません。そこではまさに徒弟制度の中で主人と仕えるもの、つまり弟子、訓練を受けるものとしての意味も当然あります。しかし、「謎のようなパラドックス」と引用していますが、そこには、二つの矛盾をする、ないしは相反するような言葉を同時に組み合わせています。このような構造をもつ言葉は、関西学院には他にもあります。次に主語は何かと問いただした時に、それは先ほど申しましたように関西学院のすべての人であります。同時に関西学院に直接繋がらない人までも巻き込むことよってよい良き社会を構築することも関西学院の使命であり、それを担う人こそ関西学院が目指す人間像なのです。ではサービスする対象は誰かという先ほどのような戦争中の国家、狭い意味での国家であつてはいけないということは当然で

す。その言葉をベーツ先生のことばに見つけ出すとすれば、

英文の最後に書いてありますが、*“service to humanity”*

とあります。この *“humanity”* をどう訳すかという問題は
はあるかも知れませんが、人類と訳してもいいだろうと思
います。私たちの *“Mastery for Service”* は人類のよ
り良き実際の生活も含めた文化、それも含めた人類の向上
というものに *“Mastery for Service”*、まさにそれを体
現する世界市民という関西学院が求める人間像です。国際
化という言葉はいま降って沸いたように言われていますが、
神崎驥一先生も、戦中戦後に院長として関西学院を支えた
方ですが、先生が学長になった時にも国際化ということは
大事なものとして揚げられていました。自由主義とともに
国際化を重視されました。関西学院が今日のモットーを読
み取るとすれば、人類の発展に貢献する世界市民を育てる
ということになります。通常あまり安っぽい世界市民で
はない本当の意味をここに読み取ること、関西学院の「世
界市民」という概念を私たちはもつことができると思いま
す。

生き方を教えるモットー

最後にさせていただきます。私たちにはこの他にも「校
訓」や「スクール・モットー」があったと思います。しかし、
なぜこれほどまで関西学院で *“Mastery for Service”* と
いう言葉が根付いてきたのかを考える必要があります。さ
まざまなアンケートの結果をみますと、「歳をとればとる
ほどこの言葉の意味が、私たち卒業生の心の中に残って
く」という回答が多くあります。そしてチャペルが、いま
の学生がどの程度参加しているか知りませんが、「三十、
四十年経った時にチャペルが懐かしいと思う」と卒業生た
ちが言われます。クリスチャンになった方もそうでない方
も、チャペルが関西学院への懐かしさを引き出すもの、も
ちろんキャンパスそのものも大きく影響していると思いま
すが、チャペルの存在そのものが、そこで誰が何の講話を
したかを覚えていなくとも、心に残っているのです。もち
ろんそこで話された講話はそれぞれの学生の心に残ってい
くのだろうと思います。その中で話された *“Mastery for
Service”* の魅力というのは何であろうかと考えたいと思
います。それが今回のこのお話の最後になります。

くろねはる *“Mastery for Service”* のもう二重性を申し

ました。矛盾、パラドックスを言いました。ところで体育会には「Noble Stubbornness」というモットーがあります。「Noble」は気品あるという言葉です。「Stubbornness」というのは頑固なままでということですね。本来この言葉はおそらく貴族主義的なものと市民的なものに対応する言葉だろうと思います。この言葉は畑敏三先生がもともとはテニス部のために与えられ、そしてその後体育会全体に広がっていったモットーでした。関西学院の二つの重要なモットーに矛盾ないしはパラドックスが含まれているとすれば、そこにも何か意味があるのではないかと考えざるを得ないと思います。

私は経済思想史を専門にしています。経済学やヨーロッパ思想の中では「利己心」と「利他心」の相克というものが絶えず問題にされています。社会思想史の授業になってはいけません。「利己心」と「利他心」は、一人の心の中にあり、絶えず葛藤し続けるものです。ある時は自分のためにやらないといけないと思いきると、「利他心」つまり他人のことを考えることで、利己心にブレーキをかけます。ブレーキをかけるという表現は現代的なものです。アダム・スミスは、「利己心」は人間を行動に導くためのエンジンだと考えますが、他方で「利他心」はそれを制御

するブレーキだと考えます。そのアクセルとブレーキが絶えず働きあつて車は安定した走行をします。アダム・スミスの時代は車のない時代ですので、このような表現を使つたわけではありません。しかし、一方では「利己心」が人間に備わっていることよつて人間が栄えていくけれども、それら人間の集合である社会を安定した社会にするためには「利他心」が必要だと考えているのです。この矛盾、パラドックスの関係にあるものをいかにコントロールするかは、おそらく現代社会でも根本的な課題だろうと思います。もう一度さきほどの「小寺学長代行提案」の言葉を思い出していたきたいと思います。ここには「建学の精神」と書いてありますが、「スクール・モットー」と読み替えてもいいと思います。レジユメにも書いてあります。「建学の精神は、常にその時々われわれの具体的な現実の中で問い直され、具体化される努力が払われるのでなければ、死語となるであろう。」と書かれています。

人間に生来与えられている矛盾やパラドックスの存在を日々生きている人間が真摯に受け止め、その矛盾・パラドックスを何とか工夫しながら進むことが、生きることだとすることであれば、「奇妙なパラドックス」をもつ「Mastery for Service」や「Noble Stubbornness」という関西学院

のモットーは、まさに私たちに人としての生き方を教えてくれているのではないのでしょうか。だからこそ、五十年、六十年生きた私たちはこの言葉を再び思い出すことで、その長い人生が二つの矛盾、パラドックスを何とか解決しようとして七転八倒した自分を振り返ることになるのではないのでしょうか。この言葉が年いけばいくほど、私たちの心の中でこの言葉が腑に落ちているからこそ、これらモットーが心に響いてくるのではないのでしょうか。私ももう六十五を越えましたが、まだ、腑に落ちていません。まだまだ、未解決なものを抱えているからです。

このように“Mastery for Service”を考えると、この「スクール・モットー」もまた私たちの日々生きる指針のひとついろいろな考え方がありますから、あくまでもひとつだろうと思いますが―となりえるであろうと思います。関西学院を卒業する皆さんは、こうしてして“Mastery for Service”に出会ったのです。ぜひこのモットーを生きたる指針として大切にしていたきたいと願っています。創立記念が節目として祝われるのは、一二五周年の次は一五〇周年だそうですから、ここにお集まりになっている学生のみなさんが二十二歳とすれば、その時には五十歳前後になられていることとなります。その時に“Mastery

for Service”を思い起こして下さい。そして、この話をした井上琢智という教員のことを思い出して下さい。そうなれば、私のこの会でのひとつの役割が二十五年後に多少なりとも果たせることになると思います。どうもありがとうございます。ありがとうございました。